

Topics

各紙掲載記事より 96年4月～7月

■96年4/25 (読売) 学生野球に救いの女神 関西六大学野球に史上初の女性審判がデビュー。「男性社会」のイメージが強かった学生野球にさわやかな新風を吹き込んだのは鷹見仁子さん (22)。人手不足解消と人気回復を狙っている。

■5/13 (報知) 7度目五輪聖子 参院議員の橋本聖子 (31) が夏冬合わせて7回目の五輪出場を決め、史上初の国会議員五輪選手となった。種目は自転車女子スプリントと3千メートル個人追い抜き。7回出場は世界女子及び、日本男女を通じ最多記録。

■6/11 (読売) 宗教の「壁」へ「走り続ける」陸上女子千五百メートル世界チャンピオンのハッシバ・プールメルカ (27) は故郷では「アルジェリア女性のシンボル」と呼ばれる、女性解放の旗手的存在だ。しかし栄光とは逆に、イスラム原理主義テロの名指しの「脅迫」を呼ぶはめに、世界選手権でランニング、短パンの服装をしたことで、「イスラム女性にふさわしくないスキャンダラスさ」を告発された。五輪に向けてドイツで練習を積むプールメルカ周辺の警戒ぶりの背景には、この数年間で4万人とも言われるテロの犠牲者の数がある。

■6/18 (産経) 女子一挙に150人、男子と並ぶ日本オリンピック委員会 (JOC) は17日、アトランタ五輪に出場する日本選手団を発表した。選手団総数は498人。選手の総数は男子159人、女子150人で、女子の躍進が目立ち「女性のオリンピック」とも言われる。

■6/21 (日刊スポーツ) 女性幹部少ないIOC 女子選手の増加が著しい五輪だが、世界のスポーツ組織のトップレベルで決定権を持つ女性は著しく少ない。五輪を押し進めるIOC理事に女性はたった一人だけ。IOC委員は106人中7人にすぎない。IOCではスポーツ各界幹部の女性比率を、2000年末までに10%に引き上げることを目標にしている。女性の参加抜きにしては、大会自体が存続できない社会状況になってきた。世界の人口の半数が女性であることを考えれば、女性のリーダーが多数出てこなければ真の意味での女性参加とはいえない。

■6/27 (スポニチ) 世界“進出”女社長腕まくり アトランタ五輪から正式種目になったビーチバレーの日本女子代表、石坂有紀子 (28=フリー) は人材派遣などを手がける会社の社長の肩書きを持つ異色選手。ほかの女子選手が華々しい6人制の経験を誇るのと対照的に、バレー経験は中学まで。ビーチバレーに出会って5年。夢にさえ思わなかった五輪出場を実現させる。

■7/3 (朝日) 伊達、「聖地」で力みせた 世界最古の伝統と権威を誇るテニスの聖地ウィンブルドンで、日本のエース伊達公子が本領を見せつけた。第13シードのマリー・ピエルス (仏) を逆転で下し、日本女子初のベスト4進出。初めて経験する夢のセンターコートで、1974年大会で沢松和子がヘルドマン (米) を破って以来の一勝ともなった。

■7/19 (朝日=共同) 宣誓はテレサ・エドワーズ かつてバスケットボールの日本リーグで活躍した米国女子代表のテレサ・エドワーズが19日のアトランタ五輪開会式で全参加選手を代表する選手宣誓の大役を務めることになった。米国女子選手の選手宣誓者は初めて。